

神戸女学院史料室だより

一九八八年は、史料室にとっては平穩の年であったと言えることができる。最大の変化は、吉田真紀専任職員が際会した二つの慶事―結婚と懐妊であらう。即ち、七月十日に八代学院教諭の石村昌之氏と結婚して石村と改姓、間もなく赤ちゃんを授かったことがわかったもので、出産予定は三月三十日。従ってこの『学院史料』第七号は奇しくも誕生の時期を共にする。それはまた復活節の季節でもある。なお、元職員の方々のところでも吉年（現・池田）ユウ子姉は過ぐる春、佐伯（現・鈴木）睦姉はこの秋、それぞれ長女、三女を恵まれた由。新しい世代、新しい時代への期待と責任とを改めて実感させられる。

それにつけても、仙台における夏の二日間は感銘深いものであった。すでに再三言い及んだことであるが、すばらしい先駆者たちに恵まれた学院の善き精神を風化させてはならぬと思う。そのためにも学院史料室は活かされねばなるまい。御協力下さった同窓生方に感謝申し上げる。

史料室の日常の仕事は前年度と大きく変わるところはなかったが、新たに「ブラウン書簡」の訳註にとりかかるについて、前号からの誼みで、本学院調査室嘱託職員・寺西裕加恵姉に、その休日を割いての協力を願うことになった。手書き文書のマイクロフィルムとの対決は、誰にでもたやすく耐えられるというものではないと思われるから、この貢献を非常にありがたく享受している。

（若山 晴子）